

サ変動詞語幹の表記および読みがなの 基準について

Notation Method of Stem of Verbal Noun and Criteria of Furigana

中川 秀太

NAKAGAWA Shuta

1. はじめに

「考察する」の「考察」や「カットする」の「カット」など現代日本語における複合サ変動詞の語幹の標準表記を検討すること、さらにサ変動詞語幹以外の品詞も含め、読みがなの一般的な基準を考えること、これが本稿の目的である。

サ変動詞語幹は、文法的・意味的な研究は数多く行われているものの、表記の観点から全面的に検討したものはない。しかし後述するように、標準表記、表記のゆれといった観点から考察すべき事柄は少なくない。また、読みがなについては、文学作品などにおける文学的・娯楽的な使用について論じた研究はあっても、公的・私的を問わず、情報の客観的な伝達を主な目的とする分野・場面における読みがなの基準を探る研究は乏しい¹。そのような分野・場面としては、たとえば新聞・放送、学校現場（主に母語話者に対する小中高の国語教育や非母語話者に対する日本語教育の場）で用いる教科書、または論文、小論文、レポート、業務報告書、商品の説明書、不特定多数の相手に見せる文書、こういったものを想定している。読み手が確実に書かれていることばを読めることが必要な場ということであり、そこでは読み手が読み方に迷ったり誤って読んだりすることのないように、書き手が文章を整えることが求められる。このような分野・場面では、文学作品などは異なり、読みがなによって通常とは異なる漢字の読みを示すというようなことは原則として不要なことである。本稿の筆者は文学・娯楽の場で読みがなが活用されることを否定するものではないが、いついかなる場でもそのような使い方が認められるというようには考えない。場をわきまえたメリハリのある使い方が求められるというのが本稿の基本的な立場である。したがって、以下での読みがなの議論には、文学作品などにおける使用は含まない。

以上の前提に基づき、本稿では、①サ変動詞語幹の表記の原則、②表記のゆれの特定と対処法、③実用的（文学的・娯楽的な目的ではなく）な読みがなの基準、といったことを議論する。それにより、現代日本語の文字運用における問題点の一端を明らかにし、サ変動詞語幹の標準表記と読みがなの議論の基礎となることを目指す。

本稿でよく使う用語について確認しておく。ここで言う「読みがな」とは「漢字の上に付ける「ルビ」または漢字の後ろに（ ）で付けるひらがな表記のこと」（『NHK 漢字表記辞典』（2011年刊行。以下『NHK 漢字』）の「原則」p.8）である。また「語形」という

語は「個々の単語の形」の意で用い、個々の単語を口に出して言う意の動詞としては「発音する」を用いる。名詞としての「発音」は、個々の単語の場合に加えて、いわゆる鼻濁音や母音の無声化など、さまざまな語に共通する音声的な特徴について述べる際に用いることが多いため、個々の単語の話であることを明確にするためには「語形」のほうがふさわしいと考えたためである。語形と読みがなの関係は、たとえば「母音」ないし「母音(ぼいん)」とある場合には、かなの「ぼいん」が「語形」を示し、書きことばにおける語形の表示手段が「読みがな(ルビ)」であるというふう整理される。話しことばでは「ボイン」と発せられた音声によって語形が表示される。外来語を記す場合は、基本的には「コイン」のように表音的な性質を持つカタカナによって語形が一意的に示されるため、読みがなのようなものは不要である。

以上の問題を考えるにあたり、筆者は『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(2016年刊行。以下『NHK アクセント』)を資料とした。放送の標準表記が示され、また『NHK 漢字』よりも多い約75,000語が載ることが主な理由である。山下(2017, p.82)に『NHK アクセント』では『NHK 漢字』をもとにして「各語に表記についての情報をつけた」とあるように、この辞書は表記辞典として活用することも視野に入れて編集されている。ただし両方の辞書に載る語について検討する際は、『NHK 漢字』を併用する。筆者は編集協力という立場で両辞書の編集に携わり表記欄を担当した。『NHK アクセント』では品詞と語種の付与も行った。本稿では同辞典から手作業でサ変動詞語幹(以下「サ変語幹」)を6,814例抜き出した²。また、放送における表記と新聞、教科書の表記とを比べながら表記のゆれ、およびその原因を探るために、共同通信社の『記者ハンドブック 第14版』(以下『共同』)および東京書籍の『教科書 表記の基準 2021年版』(非売品。以下『教科書』。本稿では同社の許可を得て使用)を主な比較材料として用いることとした。

さらに、表外字・表外音訓(「常用漢字表」(2010)にない漢字と音訓)を含むサ変語幹について論じる際は、都留文科大学の大学生93人(男21人・女72人)を対象にして2022年1月に行った質問紙調査の結果をもとに、どの語にどのような誤読があるのかを特定し、読みがなを論じる際の材料とする(以下「大学生調査」と記す)。

本節の最後に『NHK アクセント』における語種別のサ変語幹の内訳を示しておく。

表1 語種別のサ変動詞語幹の内訳

	語数	語例
和語	462	開け閉め、水あたり
漢語	5,939	議論、発見
外来語	296	アドバイス、エキサイト
混種語	117	恩返し、ドラマ化、のれん分け

※外来語を含む混種語は「ドラマ化」のみ。残りは和語・漢語の組み合わせによる。

2. 外来語のサ変語幹の表記

外来語は、カタカナ表記すると決めれば、それで済みそうであるが、アルファベットを用いる「OK」「PR」「Uターン」の3語については、その標準表記が問題となる。『教科書』では「オーケー」が標準表記とある。「PR」はpublic relationsの頭文字であり、「Uターン」は、もと来た方向に進むことをUの形が象徴する。文字の役割として漢字と似る。名詞

「UFO (unidentified flying object)」の場合、「ユーフォー」に加え「ユーエフォー」が用いられ、語形にゆれがある。「OK」も、この表記では「オッケー」という口語形に対処できない。したがって語形表示を優先するなら、外来語はすべてカタカナ表記するのが望ましいということになるが、アルファベット略語をすべてカタカナで書く、あるいはアルファベット略語の使用を禁止する、というのも現実には困難を伴うことが予想されるため、次のようにするのが穏当なところである³。

- (1) 外来語サ変語幹の表記の原則：カタカナで書く。ただしアルファベット略語にはアルファベットの使用を認める。語形にゆれがある（起こりうる）語は、初出において書き手の意図する語形を示す。

たとえば advice は「アドバイス」と書き、PR は「ピーアール」に加えて「PR」と書くことを認める。UFO は「UFO (ユーフォー)」ないし「UFO (ユーエフォー)」などと記すというのが語形にゆれがある場合の処理方法である。当然のことながら、その分野の原則として、アルファベット略語を用いず「ユーフォー」「ユーエフォー」とのみ書く方法もとるのであれば、読み手が語形の特定に苦勞するということはなくなる。

3. 和語と混種語のサ変語幹の表記

和語と混種語のサ変語幹は表内字・表内音訓で書ける場合は漢字表記が基本となるが、「面やつれ(蹙)」など表外字・表外音訓を含む場合は、その部分がかん書きとなる。ただし表内字・表内音訓で書ける語(要素)であっても、①語形が複数あ(りう)る場合、②当て字を含む場合、③位相的な問題がある場合、④意味による書き分けがある場合には、かん書きが選ばれうる。

まず①の事例を見る。『NHK アクセント』が「出はいり」と書くことにするのは、「でいり」と表記が重なることをさけたからである(「でいり」は「出入り」)。また「門づけ」「口づけ」「節づけ」の「づけ」のかん書きには、「付」の付着の意味が薄いことに加え、「つけ」でなく「づけ」であることを明示する効果もある。この点「えづけ・えつけ」は「餌付け」が標準とされているので、語形が隠れてしまう難点が残った。『NHK 漢字』には「えづけ 餌付け(「エツケ」とも)」と記されるが、『NHK アクセント』には「えづけ」のみが挙がる。これはNHKの2014年の放送用語委員会で「①えづけ ②えつけ」という扱いから「えづけ」のみへと変更されたことを受けたものである(山下(2014))。清濁がゆれの起こりやすい現象であることを考えれば、「付」の部分はかん書きにしたほうがよさそうである。なお「餌付け」も「餌づけ」も「えさづけ」と読む誤読には対処できない。清濁の問題は、ほかの語にもある。「べたぼめ」は「べた褒め」が標準表記であるが、ツイッター(商標)などには「べたほめ」(「ぼ」でなく「ほ」と書かれた例を見かける。

次に②を検討する。「当用漢字表」(1946)の当て字についての注意を踏襲し、マスメディアでは基本的に当て字を使わないため、たとえば「よなべ」は当て字の「鍋」を用いず「夜なべ」と書く。ただし「仕事」「試合」など、一部の語には当て字表記が標準表記となることがある。サ変語幹では「仕送り」「仕返し」の「仕」が該当する。「する」の連用形「し」が1拍であるため、「し送り」「し返し」と書くと、視覚的に1語として捉えにくいからである。「しまう」「しまい」は、「舞」の意味も生きていないと考え、「仕舞う」「仕舞い」の表記はとらず、全体をかん書きにする。それゆえ複合語の要素として用いら

れる「早じまい」「店じまい」も同様にかな書きであるが、元の語をかな書きにしたことにより、そのまま清濁の問題にも対処できる（「はやしまい」ではないことが表せる）。語源不詳の「やっかい払い」の「やっかい」は、多くの国語辞典が「厄介」を標準表記とし、『教科書』や『共同』、読売新聞の『読売新聞 用字用語の手引 第6版』（『読売』）も同様である。「厄」の漢字音は「やく」であり、「厄日」「厄年」などに用いられる。「厄」と書く促音形の語は「厄介」のみが一般的である。これについて1956年の『例解国語辞典初版』に「当て字」との注記があるのが目を引く。『NHK漢字』『NHKアクセント』では、語の成り立ちが不分明であることから、かな書きが採用された。

子ども（幼児）の使う「おんぶ」「だっこ」に「負んぶ」「抱っこ」を用いないというのが③の特徴である。誰がその語の主な使用者であり、その人にとってなじみのある表記は何かという観点が考慮されている。

④に該当するサ変語幹は「やまごもり」である。「当用漢字表」（1946）、「常用漢字表」（1981）の時代には「籠」が表外字であったため、漢字表に準拠した表記を行う分野では「山ごもり」が標準表記となった。しかし「参籠」「籠城」といった語を「参ろう」「ろう城」と書くのは不都合であるとの見方もあり、「常用漢字表」（2010）に音の「ろう」と訓の「かご」「こもる」が追加された。音は「籠」と書くことで問題が解決されたが、訓「こもる」に課題が残った。他動詞の「こめる」は「当用漢字音訓表（改定）」（1973）以来、「込める」と表記される。この表記が定着したと見なされ、2010年の段階では自他ともに「籠」を用いて「籠もる・籠める」とするわけにはいかなかった。それゆえ自動詞にのみ「こもる→籠もる」との変更が行われる。しかしこの語は、すでにかな書きの慣用が久しく、「参籠」「籠城」などと意味的に対応する「寺に籠もる」「城に籠もる」などは漢字への変更が容易でも、「心を込める」に対応する「心がこもる」などは「籠もる」とするかどうかの判断が分野によって分かれた。『岩波国語辞典 第8版』（『岩国』）、『新選国語辞典 第10版』（『新選』）、『明鏡国語辞典 第3版』（『明鏡』）などは、いずれの意味の場合も「籠もる」のみを標準表記に掲げ、かな書きにはふれない。確認できたかぎりでは『三省堂国語辞典 第8版』（『三国』）のみは「籠もる」に加えて「こもる」の選択肢を示す。『共同』は「籠もる」を使わず「心がこもる」「寺にこもる」「山ごもり」のいずれもかな書きとする。『教科書』は「外に出ない状態になる意は原則漢字」とし、「家に籠もる」「寺に籠もって修行する」の用例を示す一方、「内に満ちる意は仮名」とし、「力がこもる」「心がこもる」「声がこもる」の用例を示す。これらの点についてNHKの処理には課題が残る。「こめる」は「込める」とし、「心を込める」（『NHK漢字』）、「思いを込める」（『NHKアクセント』）の用例を示すのに対し、「こもる」には「籠もる」の表記が載るのみで用例がないからである。常に「籠もる」と書くのか、「心が～」はかな書きとするのかどうかについての言及が要る。『共同』と『教科書』は新聞、学校教科書という標準表記を必要とする場を持つ点で共通する（共同通信は通信社であるため、自社の新聞は持たず、各新聞社に記事を配信する立場にある）。各業界に共通する標準表記を構想するうえでは、放送でも可能な部分はそれらの分野と足並みをそろえるほうが望ましい。「籠もる」を不使用の訓とするか、空間的・物理的な意味では「籠」を使い、抽象的・心理的な意味では「こ」を使うとするのが無難な行き方となる。「やまごもり」や「あなごもり」は空間的・物理的な意味のほうに当てはまると考えれば「山籠もり」「穴籠もり」となる⁴。ただし漢字を使うとし

た場合には「～こもり」という語形が生じる恐れがないかどうかの確認は要る。国語辞典のように「籠もる」に統一するというのも「こもる」のみを見るならば妥当であるが、「こめる」との対応を考えると、「心が籠もる」「心を込める」に違和感を持つ書き手・読み手が出てくることは想像に難しくなく、それでは「こめる」にも「籠める」を認めるか、ということになると、いつまでたっても「こもる・こめる」の表記が安定しないということになりかねない。

以上に関連し「みごもる」の表記も問題となる。『NHK 漢字』は妊娠の意味で「妊る」の書き方もあること（表外訓）、この場合の「ごもる」の意味が単独の「こもる」ないし「籠」の意味から推測しにくい特殊なものであり、「み」のみに漢字「身」を用いたとしても、語そのものの意味の理解にはつながりにくいことなどを理由に、かな書きの「みごもる」を採用する。国語辞典は「身籠もる」、『共同』は「身ごもる」を採用するため、『NHK 漢字』とは標準表記が異なる。「身」と「ごもる」との意味関係はわからずとも、「身＝体（からだ）」に関係ある語であることがわかるだけでも漢字を使う意義があるとする考え方もある。以上のことを考えると、「常用漢字表」（2010）が出てから10年以上がたつ現在、「身籠もる」と「身ごもる」のどちらのほうが違和感が小さいか、「みごもる」を好む書き手もいるかどうかといったことについて、業界を横断した議論を要する。その結果によっては、優先表記を「身籠もる」ないし「身ごもる」とし、許容表記を「みごもる」とする選択肢も視野に入ってくる。情報検索の便から言えば、「身籠もる」「身ごもる」「みごもる」の三つもあるのは困る状態であるが、運用する人間のことを考えると、漢字を使いたいと感じる人と、場合により漢字に違和感がある人の両方をカバーできる決まりがあるほうが使いやすいこともある。また三つの候補はあっても、表外字を用いた「妊る」は現代語の標準表記としない点では、いずれの立場も共通し、僅かながら表記のゆれの解消につながっているとも捉えられる。

4. 漢語サ変語幹の表記

4.1 漢語サ変語幹の表記の概要

最も数の多い二字漢語の表記は4.2以下で論じることとし、ここでは先に三字漢語（126語）、四字漢語（51語）を検討する。

三字漢語は「温暖化」「立候補」など漢字で表記するものがほとんどであり、「ごちそう」「じか談判」のみが表外字・表外音訓を含むためかな書きである。口頭語であることも、「ごちそう」の全ひら（語全体がひらがな表記）を選びやすくさせる。

「じか談判」は「じか」が表外音であるため『NHK アクセント』はかな書きにするが（和語の「とりひき」を含む「じかとりひき」は「じか取引」）、『共同』は「直談判」「直取引」を標準表記とする。この不一致の原因は何か。『共同』では、三字漢語の語頭をかな書きすることに抵抗があると判断したのか、慣用表記（漢字表にない音訓を含んでいるが、熟字訓などで慣用表記として使うもの（『共同』の p.123））として「直談判」「直取引」を認めている。「直取引」が漢字であり「じか履き」「じか火」の「じか」にかなが採用されていることを考えると、三字漢語ではなく「三字で漢字表記する語の最初の部分」とするほうが正確であり、「直取引」は、「とりひき」の部分で「取引引き」ではなく送りがなの省略された「取引」にすることにより、見かけ上は、「直取引」全体が三字漢語に類する

ものとして捉えられる。『共同』では「じか談判」「じか取引」という表記に対する文字列上の違和感を解消するために漢字表記を採用したと考えられる⁵。

四字漢語は、51語中の11語が「う余曲折（紆余曲折）」「切さたく磨（切磋琢磨）」「切歯やく腕（切歯扼腕）」「彫心る骨（彫心鏤骨）」など表外字・表外音訓を含む語であり、これらの交ぜ書きには批判が生じやすい。なるべく難しい語は言いかえるという方針を立てたとしても、その方針は「せっしやくわん」「ちょうしんるこつ」には当てはまるものの、「うよきよくせつ」「せっさたくま」は難語としにくい。その一方で、これらの語の全ひら表記が定着しているとも言いがたい。それゆえ日本語の語彙を大事にするという前提と、「常用漢字表」のような表記の目安、基準というものも尊重するという方針のもとに、使用にあたっては読みがなを初出の際につける、というのが落としどころとなる。

なお以下では、ルビが示される表記辞典や書籍の引用を行う際は、ルビのままとし、本稿の筆者が読みがなが要ると考える場合は丸カッコの中に語形を示す⁶。「交ぜ書き」は漢語、特に二字漢語の前後の要素を漢字とかなで書き分ける意に限定する。たとえば「紆余曲折」は「紆余」と「曲折」の組み合わせからなり、それぞれ「常用漢字表」に従えば「う余」「曲折」という表記となり、交ぜ書きの是非は「う余」の部分に限定して論じれば済む。このように、多くの四字漢語は、上記の交ぜ書きの定義で処理可能である。

難漢字を含むゆえに、語としても「うよきよくせつ」などは不要とするなら、その根拠が要る。また、全ひら、交ぜ書きでも違和感なく通用させる方法を提示する必要がある。

一方、自分は読めるから漢字表記したいというのであれば、その文章の読み手が無理なく読めるとの根拠を示す必要がある。

いずれの立場にしても根拠の提示は困難である。それゆえ読みがなを使うという結論を述べた。ただし読みがなにより難読の問題が解消されても、意味が理解されないならば難語の問題は解消されないままである。この問題も解消するとなれば、前後の文脈を整え、それにより語の意味が理解しやすいように工夫する必要がある。読みがなを使えば、問題はなくなると考えるのは早計である。読みがなについては5で改めて論じる。

4.2 表内字・表内音訓で書ける二字漢語のサ変語幹

「常用漢字表」の表内・表外という基準で分けると、『NHK アクセント』の二字漢語は、次のような内訳となる。

表2 二字漢語のサ変語幹の「常用漢字表」を基準にした内訳

	語数	語例
表内字・表内音訓からなる語	5,427	検討、勉強
表外字・表外音訓からなる語	335	斡旋、嗚咽

5,427語のうちには、表内字・表内音訓で処理できる語であっても、かな書き・交ぜ書きが優先される「あいさつ」「うっ屈」「うっ血」「うっ積」「抽せん」「らくご」が含まれる。「揆」「拶」「鬱」は「常用漢字表」(2010)に追加された漢字であるが、「あいさつ」の表記が定着していること、「鬱」の読みが難しく、読めたとしても書きにくい字であることなどが、かな書き優先の理由である。

「抽せん」「らくご」は新聞の使う「抽選」「落後」を優先的に採用しなかったための表

記である。「抽選」など代用表記（代用字）と呼ばれる語を以下に見ていく。

代用表記の基準は1956年に国語審議会から文部大臣に答申された「同音の漢字による書きかえ」と、これにならって日本新聞協会が定めた「日本新聞協会の、同音の漢字による書きかえ」である。当用漢字の使用を円滑にするため、表外字を含む語について「当用漢字表」に含まれる同音の漢字に置き換えようとしたものである。新聞協会の代用表記（いわゆる新聞代用字）に関し、ここでは『新訂 新聞用語集』（1969）から書き換えに関するものを抜粋したとする『新しい国語表記ハンドブック 第9版』（2021、三省堂）の一覧を参照する。二つの基準に示された語のうち、「奪掠→奪略」「防遏→防圧」は『NHK アクセント』『NHK 漢字』には立項されていない⁷。

以上の2語を除くと、149のサ変語幹が代用表記を含むものとして確認でき、「廻転→回転」「彎曲→湾曲」などは、その表記が定着した。かつて違和感があるとされた代用表記のうち「委縮」や「棄損」は2010年の「常用漢字表」に基づき本来の表記「萎縮」「毀損」に戻された⁸。

一部、放送と新聞で扱いの異なる語も残る。「燻蒸」（「燻」が表外字）はNHKが「くん蒸」、『読売』が新聞代用字を含む「薰蒸」を使う。「燻」は「いぶす」意であり、「かおる」意の「薰」では違和感があるというのがNHKの判断である。この点は新聞でも意識されるのか、『新聞用語集 2022年版』は「→燻蒸、薰蒸」の順に示す（2007年版では「薰蒸、燻蒸」の順）。『共同』は第13版（2016）まで「薰蒸」を用いたが、第14版（2022）で「燻蒸」に変更した。一方「ふえん」はNHKが新聞代用字を含む「敷延」を使うのに対し、『新聞用語集 2022年版』は「敷衍」のみ（2007年版では「敷延・敷衍」）とし『共同』『読売』も同様の扱いである⁹。

4.3 表外字・表外音訓を含む二字漢語のサ変語幹

新聞や放送など「常用漢字表」に準拠する分野では、表外字・表外音訓を含む語は原則として、かな書き・交ぜ書きで処理する。言いかえを行い、その語を使わない場合もある。ただし会社ごとに表外字・表外音訓が独自に表内字並み、表内音訓並みのものとして採用されることもある。NHKでは「教誨」を特例（単漢字では使用せず、熟語の中で用いる表記として認めたもの）で採用し、読みがなをつける。「凱旋」「拿捕」も同様である。

以上の語を除くと『NHK アクセント』では336語が全ひらか交ぜ書きである。このうち206語は『NHK 漢字』にも載る語、つまり表記が問題になりやすい語群である。ここでは、この206語のうちの「欣喜」「猜疑」を除く204語を重点的に扱う¹⁰。全ひらの語は62語、交ぜ書きの語は142語である。交ぜ書きの語は「愛ぶ」「編さん」など「漢字+ひらがな」構成のものが62語、「いっ水」「わい曲」など「ひらがな+漢字」構成のものが80語である。

以下では『NHK 漢字』で全ひら指定の語、交ぜ書き指定の語（後項がかなの場合と前項がかなの場合に分ける）について検討する。

その際、1で述べたように大学生93人に対する質問紙調査の結果を併用しながら、読みやすい語、難読の語、誤読の起こりやすい語、などについての検討も行う¹¹。調査は、204語の熟語の漢字表記のみを記した紙を対象者に提示し、それぞれの語の右側に当人が適切だと考える語形（読み）を記述させる形をとった。

4.3.1 全ひらの語

『NHK 漢字』が全ひらとする61語について、以下の表には、語ごとに「漢字表記」「正答の数」「誤読例（上付き数字で誤読の数を示す。よく知られた誤読がある場合は、回答者数の多寡にかかわらず示すこととする）」「共同の扱い」「教科書の扱い」の順に示す（記号の説明は表の下に記す）。語の順番は、正答の数が多かったものからとし、同数の場合は五十音順とする。「教科書」の欄には、項目が『教科書』にあれば、その標準表記を示し、項目がない場合は「項目なし」と記す。『教科書』の欄で「誹謗」のように漢字表記のみが示されているものは「かなでは意味が理解しにくい語や学習上、重要な語」であり、「ちゅうちょ／躊躇」のように「かな表記／漢字表記」とあるものは、交ぜ書きをさけるためといった理由から個別に漢字表記が許容として選ばれている語である（中川（2020、p.106））。いずれの場合も、必ず読みがなをつけて用いることになっている。

なお以下で『共同』の詳細を記すのは、『共同』が見出し語をそのまま使うのか、言いかえ語を優先するのかということを厳密に示すからである。それによって、語の難度がうかがえる利点がある。『NHK 漢字』には「類語・言いかえ例」はあるが、見出し語との間で運用の際の優先順序がつけられていないという難がある。

表3 全ひらの語の大学生調査の結果と『共同』『教科書』の扱い

	正答数	誤読例	共同	教科書
喧嘩	92		B	けんか
嗚咽	88		B	項目なし
誹謗	88		E	誹謗
躊躇	87		B	ちゅうちょ／躊躇
徘徊	87		E	徘徊
咀嚼	85		C	項目なし
痙攣	84		B	項目なし
接吻	84		D	項目なし
付度	84		E	項目なし
麻痺	83		B	まひ／麻痺
齟齬	79		E	項目なし
揶揄	78		C	項目なし
震撼	77		E	項目なし
庇護	73		D	項目なし
嗜好	72		E	し好・嗜好
鼻屑	72		A	ひいき
懺悔	70		A	項目なし
剽窃	69		D	剽窃
凌駕	69		D	凌駕
刮目	68		D	項目なし
灌溉	68		B	かんがい／灌溉
狼狽	68		C	ろうばい／狼狽
斡旋	66		B	あっせん／斡旋
輪廻	66	りんかい ¹⁶	F	輪廻
剪定	64	ぜんてい ¹⁰	E	項目なし
呪詛	62		G	項目なし
俯瞰	62		E	俯瞰
一瞥	61		D	項目なし

	正答数	誤読例	共同	教科書
竣工	61		E	しゅん工／竣工
折檻	61		A	項目なし
咆哮	60		D	項目なし
攪拌	59		E	かくはん／攪拌
鞭撻	56		G	べんたつ／鞭撻
弛緩	54	ちかん ³	E	項目なし
憔悴	53	しょうそう ¹⁰ ・しょうそつ ⁷	E	項目なし
醜陋	53	めいちょう ¹⁰	E	醜陋
慟哭	52		D	項目なし
煩悶	51		G	煩悶
叱咤	49	しっせき ¹⁰	F	項目なし
蹂躪	45		C	項目なし
喧伝	44	せんでん ¹⁶	D	項目なし
逍遙	35		D	項目なし
風靡	33		E	風靡
夭折	31		D	夭折
邂逅	30		D	項目なし
来迎	30	らいげい ³²	G	項目なし
彷徨	29	ほうおう ¹⁰ ・ほうろう ⁶	D	彷徨
涵養	28		D	項目なし
耄碌	25		B	もうろく
輻輳	22		D	項目なし
横臥	21		G	項目なし
蹲踞	19		B	項目なし
匍匐	13	ぶどう ³⁰	C	項目なし
薨去	10		G	項目なし
顰蹙	10		C	ひんしゆく
縊死	9		D	項目なし
糜爛	9	ひょうらん ⁵	C	項目なし
睥睨	9		G	項目なし
按排	5	あんび ¹⁹ ・あんばい ¹³	案配	項目なし
容喙	1	ようろく ¹⁰	G	項目なし
浚渫	0	しゅんちょう ⁰	A	項目なし

『共同』における A～G の記号は、以下のことを意味する。丸カッコ内の数字は該当する語の数である。

- (2) A (4) : 全ひらのみが選択肢である。
 B (9) : 全ひらが優先的であるが、言いかえも載る。
 C (7) : 言いかえが優先的。第 2 候補以下に全ひらが載る。
 D (16) : 言いかえのみ。見出し語は選択できない。
 E (14) : 言いかえが優先的。第 2 候補以下に読みがなつきの選択肢が載る。
 F (2) : 見出し語を読みがなつきで表記する。言いかえの選択肢はない。
 G (8) : 見出し語として立項されていない。

※「按排」は『共同』など新聞各社は「案配」を用いるので A～G の範囲外。

A、B は、全ひらでも、その語が通用する可能性が高いことを意味する一方で、そのうちの「浚渫」や「蹲踞」などは、漢字表記のみで提示された場合には、語形が特定できな

い読み手が多くなる点に注意が要る。Dは、その語が少なくとも報道の分野では必要性が高くないことを表す。それはCとEにも言えることではあるが、場合によっては、それらの語を使う必要のある場合もあり、全ひらで通じやすいかどうかの点において、両者には差がある。Fになると、言いかえが困難であり、読みがなをつけてでも、表外字・表外音訓を含む語を使用したほうが望ましいと判断された語群ということになる。Gの語は、「煩悶」「俯瞰」のように『読売』には記載がある語もあり、報道で必要な語かどうかは簡単にはまとめられない。

危険が大きいのは、『共同』のCやDの語のうち、小説や評論などにおいて、読みがななしに用いられた場合に、誤読したまま読み手が記憶してしまう可能性のある語である。「喧伝」「彷徨」「匍匐」といった語がこれに該当する。「薨去」「颯感」などは、偏やつくりをもとに類推読みを行うこともしにくい。単に「読めない」という結果が生じるのみであるから、誤読という観点から言えば、影響は小さい。一方「喧伝→せんでん」「匍匐→ぶどう」などは、「セン」と読める部分が「喧」に含まれること、「匍匐」と「葡萄」の形が似ていることといった要因により、ある程度、一般的な誤読が生じている。言いかえ、かな書き、読みがなといった方策を考えるべき優先度の高い語群である。

なお『NHK漢字』が全ひらとしていた語のうち、『共同』が読みがなつきの選択肢を設けている語(EとF)は16語ある。以下の交ぜ書きの場合も含め、『共同』に読みがなをつける判断をしている語が『NHK漢字』よりも相対的に多くなるのは、放送ではアナウンサーなどによる音声表現が読みがなの代わりになりうるのに対し、新聞では書きことばのみによる表現であるため、音声による補助が期待できないことが背景にある。それゆえ、『NHK漢字』では、表外字・表外音訓を含む語を読みがなつきで使うことには、これまで慎重な態度で臨んできた。

4.3.2 「漢字+ひらがな」の語

以下では、「愛ぶ」など「漢字+ひらがな」の構成を持つ交ぜ書きの62語を検討する。大学生調査の結果と『共同』『教科書』の扱いは、以下のとおりである。

表4 「漢字+ひらがな」語の大学生調査の結果と『共同』『教科書』の扱い

	正答数	誤読例	共同	教科書
安堵	93		E	項目なし
復讐	90		E	復しゅう／復讐
驚愕	88		E	項目なし
化膿	84		E	化のう／化膿
啓蒙	81		E	啓もう／啓蒙
推敲	81		E	推こう／推敲
飛翔	80		E	項目なし
被曝	79		B	項目なし
祈禱	78		E	項目なし
団欒	78		A	団らん／団欒
信憑	77		C	信びょう性／信憑性
同棲	77		D	項目なし
苦悶	76		E	苦悶
投函	75		F	項目なし

	正答数	誤読例	共同	教科書
排泄	75		C	排せつ／排泄
黙禱	75		C	黙とう
対峙	74		E	項目なし
愛撫	71		E	項目なし
標榜	67		D	標榜
漏洩	67		C	漏えい／漏洩
錯綜	66	さっそう ¹¹	E	項目なし
拔擢	66	ばっすい ¹⁶	C	抜てき／拔擢
分娩	65		E	項目なし
寄寓	64		D	項目なし
編纂	61		C	編さん／編纂
殺戮	58		C	項目なし
反芻	57		B	項目なし
欺瞞	51		E	欺まん／欺瞞
操舵	51		F	項目なし
冒瀆	51		E	冒とく／冒瀆
改悛	48		E	項目なし
放蕩	47	ほうよう ⁹	E	放蕩
研鑽	46		C	研さん／研鑽
隱遁	44		D	項目なし
演繹	44	えんたく ¹⁵	F	演繹
席卷	40	せっかん ²⁸ ・せきまき ⁰	席卷	項目なし
通牒	40		D	項目なし
伝播	39	でんぱん ¹⁹	D	項目なし
当籤	38		C	項目なし
警邏	35		D	項目なし
押捺	30	おういん ²⁰ ・おうな ⁸	C	項目なし
帰趨	30		D	項目なし
吐瀉	29		C	項目なし
改竄	27	かいきゅう ¹⁵ ・かいそ ⁵	C	項目なし
介錯	27	かいさく ⁴⁷	G	項目なし
困憊	27	こんび ²⁴	E	項目なし
跳梁	27		E	項目なし
遊蕩	27		D	遊蕩
収斂	24		D	収れん／収斂
投擲	24		B	項目なし
病臥	22		G	項目なし
反駁	20		D	反ばく／反駁
披瀝	18		披歴	項目なし
論駁	16		D	論ばく／論駁
揮毫	12		F	項目なし
横溢	10	おうえき ¹³	D	項目なし
招聘	9		E	項目なし
垂涎	6	すいえん ¹⁸ ・すいてい ¹⁴	B	項目なし
登攀	6		E	項目なし
炊爨	2		G	項目なし
分蘖	1		B	項目なし
封緘	0	ふうめつ ¹⁹	G	項目なし

記号の説明は以下のとおりである。

- (2) A (1) : 全ひらのみが選択肢である (『NHK 漢字』は交ぜ書き)。
 B (5) : 交ぜ書きのみが選択肢である。
 C (12) : 言いかえが優先的。第2候補以下に交ぜ書きが載る。
 D (13) : 言いかえのみ。見出し語は選択できない。
 E (21) : 言いかえが優先的。第2候補以下に読みがなつきの選択肢が載る。
 F (4) : 見出し語を読みがなつきで用いる選択肢のみがある。
 G (4) : 見出し語として立項されていない。

※新聞では「席卷」を慣用表記として表内字・表内音訓並みに用いる。「披瀝」は『共同』では新聞代用字の「披歴」を使う。「とうせん」は『NHK 漢字』では「①当せん ②当選」とする。

以上のうち、危ういのは「席卷」や「伝播」のように、現代の文章の中でそれなりに使用されることがあり、かつ、目立つ誤読がある語の場合である。

ひとまずAは除外し、B~Fの語数(55)で交ぜ書きの選択肢があるBとCの語(17)を割ると、交ぜ書きが可能な語の割合は30.9%となる。「ひらがな+漢字」の語との比較は後述することとし、ここでは、かな書き部分が1拍の語がどの項目に含まれているのかを確認する。「病臥」は『共同』にないため、残りの語で見ると、「安堵(E)」「対峙(E)」「吐瀉(C)」「警邏(D)」「伝播(D)」となっている。漢字の読みが1拍の語は、「安ど」のように後ろ側がかな書きであると、「安ど」全体で一語というようには視認しにくくなる。それゆえ、これらはDかEに分類され、『共同』が特に交ぜ書きをさけようとしている語として理解できる。ただし「吐瀉」のみはCであり、「吐しゃ」が第2候補として認められている。『共同』に「吐瀉」は「→吐き下し 吐しゃ物」と書かれていることから、「吐瀉」の交ぜ書きは単独で「吐瀉する」などと用いることを想定しているわけではなく、「吐しゃ物」という複合語の中でのみ使うことを意図していることがうかがえる。この形であれば、「吐しゃ物」全体で一語であって、「吐」と「物」には含まれた「しゃ」を助詞や助動詞であるかのように誤解する恐れは低い。したがって基本的には、交ぜ書きに際しては、後項の要素が1拍である場合は、言いかえなどの必要性が特に高いものの、後ろに漢字表記する要素が続き、「漢字+ひらがな+漢字」で一語として用いられる場合には、交ぜ書きが限定的に認められると理解することができる。

4.3.3 「ひらがな+漢字」の語

以下では「いっ水」など「ひらがな+漢字」の交ぜ書きの80語を検討する。前述の「漢字+ひらがな」の場合よりも、「ひらがな+漢字」の語は、その前に来る助詞などとの区別が紛らわしくなる恐れがあり、交ぜ書きへの批判は強い(分かち書きをしないという前提のもとでは)。大学生調査の結果と『共同』『教科書』の扱いは以下のとおりである。

表5 「ひらがな+漢字」語の大学生調査の結果と『共同』『教科書』の扱い

	正答数	誤読例	共同	教科書
炸裂	91		B	項目なし
嘔吐	90		D	おう吐/嘔吐
謳歌	89		D	謳歌

	正答数	誤読例	共同	教科書
迂回	86		D	項目なし
拮抗	86		D	項目なし
牽制	86		A	けん制／牽制
梱包	86		D	項目なし
灼熱	86		D	しゃく熱／灼熱
豹変	86		D	豹変
悶絶	84		B	項目なし
蔓延	83		B	まん延／蔓延
昏睡	82		D	項目なし
捏造	82		D	ねつ造／捏造
瞑想	82		D	瞑想
牽引	81		B	けん引／牽引
倦怠	80		E	項目なし
焙煎	80		F	項目なし
乖離	79		E	項目なし
淘汰	79		D	淘汰
寵愛	76		C	項目なし
闊歩	75		D	項目なし
昏倒	74		F	項目なし
沐浴	74		D	項目なし
攪乱	73		B	かく乱／攪乱
孵化	72		B	ふ化／孵化
峻別	71		C	項目なし
瞑目	71	もうもく ⁸	C	項目なし
扮装	70		D	ふん装
壊死	68	かいし ¹⁷	E	項目なし
邁進	66	まんしん ¹²	B	まい進／邁進
捺印	63		C	なつ印／捺印
贖罪	62		D	項目なし
濾過	62		B	ろ過
恫喝	60		B	どう喝／恫喝
逡巡	58		C	項目なし
挺身	57		D	項目なし
贗作	56		D	項目なし
殲滅	52		C	項目なし
逼迫	51		D	項目なし
罹患	51	らかん ¹⁶	E	罹患
姦淫	48		F	項目なし
剃髪	48		C	項目なし
膠着	47		D	こう着／膠着
罹災	46	らさい ¹⁵	D	項目なし
贗造	47		F	項目なし
轟沈	47		F	項目なし
雁行	43		F	項目なし
艤装	43		E	項目なし
逗留	43		C	項目なし
幫助	43		B	ほう助／幫助
諫言	42		C	項目なし
凋落	42		C	ちょう落／凋落

	正答数	誤読例	共同	教科書
輻射	42		C	項目なし
爛熟	42		F	らん熟／爛熟
歪曲	42	わんきょく ²³	D	わい曲／歪曲
喀血	40		D	項目なし
懼病	40	らびょう ¹²	C	項目なし
遁走	39		C	項目なし
轢死	37		A	れき死／轢死
呻吟	36		D	項目なし
吻合	32		F	項目なし
兌換	30		E	項目なし
屹立	29		F	項目なし
讒言	28	ざれごと ¹²	C	項目なし
扼殺	28		C	項目なし
轢断	28	りんだん ⁸ ・れつだん ⁶ ・れんだん ⁵	F	項目なし
譴責	27		A	項目なし
曝書	27	ぼうしょ ¹⁶	F	項目なし
斟酌	23	かんしゃく ¹⁰	C	項目なし
鼎談	23	けんだん ¹²	D	項目なし
鼎立	22	けんりつ ¹⁶	F	項目なし
驀進	18		C	ばく進／驀進
惹起	14	しゅうぎ ⁹	C	項目なし
鳩首	12		F	項目なし
夭逝	11	ようせつ ¹⁴	F	項目なし
蟄居	10		D	項目なし
溢水	9	いんすい ⁹	F	項目なし
曳航	8	うこう ⁵	A	項目なし
捺染	6		F	項目なし
紊乱	1		F	紊乱

記号の説明は以下のとおりである。

- (4) A (4) : 交ぜ書きのみが選択肢である。
 B (10) : 言いかえが優先的。第2候補以下に交ぜ書きが載る。
 C (18) : 言いかえのみ。見出し語は選択できない。
 D (25) : 言いかえが優先的。第2候補以下に読みがなつきの選択肢が載る。
 E (6) : 見出し語を読みがなつきで用いる選択肢のみがある。
 F (17) : 見出し語として立項されていない。

※『教科書』に「紊乱」は「びんらん」でも「ぶんらん」でも見出しが立てられている¹²。

「漢字+ひらがな」型の交ぜ書きが『共同』で30.9%であるのに対し、「ひらがな+漢字」型では、AとBの語(14)をA～Eの語(63)で割ると、交ぜ書きの選択肢の割合は22.2%となる。やや交ぜ書きを用いる語の範囲が狭い。

『共同』に載る63語のうち、以前は交ぜ書き、言いかえ、読みがなではなく、表内字を用いた表記が行われていた語が1語ある。それはDの「扮装」である。かつては新聞代用字による「粉装」という表記が新聞では行われていたが、現在は『共同』のように「→装い、こしらえ、扮装^{ふんそう}」とするか、『新聞用語集 2022年版』のように「扮装^{ふんそう}」のみを選

択肢とするか、といった処理方法がとられている。このことについて、『共同』では、以下のように扱いが変遷している。まず『共同』の1957年の改訂版（1956年の初版は未確認）には「扮装」に対し「粉装、こしらえ」の「言いかえ・書きかえ」が載った。1961年の改訂増補版で「扮装→粉装、こしらえ」という示し方になる（△は表外字）。1973年の改訂新版で「扮装、紛装→装い、粉装、こしらえ」となり、使わない「ふん」の字が2種となる。1981年の第4版では読みがなの使用が許容され「扮装、紛装、粉装→ふん装、装い、こしらえ、扮装（ふんそう）」となる一方、「粉装」は不使用となった。「紛」には▲がつき、誤用の字として扱われる。「紛装」は第12版（2010）まで掲げられ、第13版で削られた。「粉装」は第4版から第7版まで示されたが、第8版で消える。一方、上記の言いかえは第5版（1985）、第6版（1990）まで続く。第7版（1994）で「ふん装」の選択肢が消え、「→装い、こしらえ、扮装（ふんそう）」となり現在に至る。「扮装（ふんそう）」という示し方が「扮装」になったのは第13版である。これにより丸カッコ内に語形を示すのではなく、ルビを使うという指示であることが明確になった。「ふんしょく」は「粉飾」とも「扮飾」とも書かれ、表内字で書くなら「粉飾」となり、『NHK 漢字』も『共同』も、「粉飾」を標準表記とする。「粉」は「飾る」意である。それゆえ「ふんそう」においても「飾る」意で「粉」を用いることができるという理屈であるが、その違和感が薄れるには至らなかった。「扮装」は大学生調査では70人の正答であり、読めないという回答がいくらか見られるものの、誤読に関しては「ばんそう」「ぶんそう」がともに1件ずつあるのみであり、目立つ誤読が存在するわけではない。これは、「分」単独では「ぶん」と「ふん」の可能性に大差がないものの（「分解」「分子」など「ぶん」のほうが語頭に立ちやすいため、「扮装」にも「ぶん」が出やすいとも言える）、「粉末」「粉飾」の「粉」や「紛失」「紛争」の「紛」が「ぶん」ではなく「ふん」と発音されることから、「扮装」の場合も、「偏+分→ふん」という解釈が行われ、「ぶん」の読みが抑圧されたことによる。したがって、表外字であることを理由にして新聞が読みがなつきで処理するのは妥当な判断であるが、誤読の可能性の有無ということに絞って考えれば、その恐れは上記の理由により低い語であると判定できる。

以上のように、表外字・表外音訓を含む漢語において、現れやすい誤読が一定数、存在することが明らかになった。これは「常用漢字表」に沿って国語教育が行われ、その範囲で児童・生徒・学生が学ぶと考えれば、決して調査対象となった大学生の責任というわけではない。そして一般の書籍などには、上記のような語が用いられ、読みがなのない場合も少なくないことを考慮すると、誤読を防ぐためには、読みがなの基準について検討する必要がある。以下では、サ変動詞以外の品詞も含めて、一般的な読みがなの基準を考察する。

5. 読みがなについて

5.1 背景

1980年刊行の『国語学大辞典』（p.863）には、明治以降の日本語における読みがなの位置づけについて「振り仮名は初学者や童蒙子女を対象とした文章に用いられ、漢字平仮名交じり文には総ルビ、漢字片仮名交じり文にはばらルビの傾向がある」とある。

また、大野（1983、p.66）では次のように指摘される。

- (5) 今日の五十歳以上の人々がすべて記憶にあるように、少年期には、ルビが振られていることによって、その本体である漢字が未知のものであっても読み下すことが可能となる。それによって知らず知らずのうちにルビがむつかしい漢字の意味や読みを教えるという大きな役目を果していた。

1911年から1923年前後まで刊行された立川（たちかわ）文庫という講談本があり（『大辞林 第4版』は「たちかわぶんこ」で見出しを立て、注記として「正しくは「たつかわぶんこ」と示す）、ここでは語が総ルビで記された。人気のあった文庫であり、たとえば映画監督の黒沢明氏（1910～1998）は『蝦蟇の油』という自伝の中で塚原ト伝（つかはらぼくでん）や荒木又右衛門（あらかまたえもん）といった剣豪の話をとくさん読んだと回想する。多くの漢字を目にし、語形（読み）も同時に覚えられる環境にあったことは、現在とは大きな違いである。

一方、新聞では、いわゆる大新聞と小新聞の違いにより、読みがなの有無にも違いが見られた。大正以前の新聞においては、知識人を主な読み手とする大新聞ではルビが少なく、大衆を読み手とする小新聞では総ルビであった（小林（2002, p.120））。小林によれば「ルビのないところは一般人には読んでもらわなくてもよい、ここは知識階級の欄だとの制作側の判断が働いていた」とのことである。ルビの有無により読者を選別するという方針は、民主主義を建て前とする現代では通用しにくい。

戦後になると「当用漢字表」（1946）が告示され「振り仮名は、原則として使わない」（使用上の注意事項）ことになったが、「常用漢字表」（1981）では、漢字使用の制限から目安へと漢字表の性格が変わったことに伴い、読みがなの使用も許容される。ただし具体的な読みがなの基準は示されなかった。2010年の「常用漢字表」でも「改定常用漢字表」に関する答申案（案）の「基本的な考え方」に「必要に応じ、振り仮名等を用いて読み方を示すような配慮」（p.7）という文言が用いられたが、具体的な基準はない。基準がなければ、どういう場合に読みがなが要のかが個々の書き手には不明である。ある人にとって無理なく読める語が、ほかの人にも読める語であるという保証はない。

「当用漢字表」の時代、読みがなは公には使わないこととなり、かな書きや言いかえが推奨されたこともあって、現在でも読みがなの使用に消極的な人もいる。本稿の筆者は、かな書きや言いかえに反対はしない。なるべく簡単な字で書ける簡単な語を使うほうが難字、難語を好んで使うよりも健全である。しかし今はパソコンやスマートフォンなどの発達によって、容易に難字、難語が一般の人にも書ける（入力できる）ようになり、相手が読めるかどうかという観点が考慮されずに文章が大量生産されているという現実がある。むやみに漢字を使うなということばに説得力を持たせられないのであれば、せめて読み手を困らせることのない表記の方策を探るほうに力を注ぎたいというのが本稿の立場である。

5.2 何のための読みがな

読みがなは、基本的には読み手のためにつけるものである。読み手が迷うことなく読めることが肝心であり、自分は読めるから、ほかの人も読めると書き手が臆断すべき事柄ではない。中国文学者の高島俊男氏（1937～2021）は複数の読みがある語については、読みがなをつけるという方針をとるが、難しいとされる漢字に読みがなをつけることには消

極的であった。その理由は「鹵簿」を例に高島（2005、p.156）で以下のように説明される。

- (6) こうしたことばに、ふりがなをつけろと言う人がよくある。そういう人は、よみがわかれば意味がわかる、と思っているらしい。しかし考えてみてください。「鹵簿」のわからない人が、「鹵簿^{ろぼ}」とふりがなをつけたら、「ああるぽか。それでよくわかった」ということがあるだろうか。——無論そんなことはありませんね。日本語の字音語は、音^{おと}（このばあい「ろぼ」）が意味を持っているのではない。文字（このばあい「鹵簿」）が意味をつたえるのである。この種のことばは、音声はさして重要でない。

編集者などに「常用漢字表」にない字を使う際に読みがなをつけるよう指示されるのが迷惑であったということのようであるが、この議論には問題がある。指示をする人が皆、読みがわかれば意味がわかると考えているわけではない。読みがながあれば、意味は文脈を頼りに理解し、単語の語形と意味とが両方覚えられるということである。仮に意味がわからない場合であっても、語形さえわかれば辞書で意味を確かめることにつながりうる。一方、語形がわからず、意味も知らなければ、文脈を頼りに意味のみが推測できるにとどまり、十分に語を理解したことになる。文字を読み書きするのが一部の層に限られていた近代以前であれば、語形は特定できなくても不都合はないということもあったかもしれない。しかし現代は、幅広い層の人々が読み書きをする時代であり、さらに外国人の学習者も少なくないことを考えれば、音声（語形）は重要ではないとは言えない。語形と意味の両方が理解できるのが望ましいあり方である。

将来の読み手のために読みがなをつけるという目的も考える。100年後、200年後の日本人、日本語学習者が過去のことを知りたいと考えて文献を読んだときに、語によっては読み方が特定できずに困るという事態が生じうる。そうならないよう表記を工夫するのが今を生きる人間の務めである、という視点を提示する。

自分のために読みがなをつけるという観点もありうる。たとえば小林（2013、p.248）には「母方^{ははかた}の祖父」という用例がある。小説家の小林信彦氏（1932～）が語形にも神経を使う人物であることは、小林（2013、p.196）の写真の「〈スチル〉は〈スチール〉ともいう。横文字だと、〈Still〉」という指摘や小林（2017、p.247）の「ドリュウ・バリモアの名前を知らない映画ファンはいないだろう。〈ドリュウ〉と書く人もいるが、古い人名辞典に合せて〈ドリュウ〉としておく」という指摘などからもうかがえる。同氏が上例に読みがなを付したのは（編集者によるとの可能性はおく）、自身の発音は「ははかた」であるが、現実には「ははがた」という言い方を聞くことがあるため、そのように読まれるのを防ぐためであると考えられる¹³。もし現実において「母方」の語形にゆれがないのであれば、「母」も「方」も基本的な漢字であり、読みがなをつけるという判断はしなかったはずである。このような方法は、より一般的な例で言えば、たとえば「依存」について「いそん」（伝統的）か「いぞん」（新しい）か、自分の持つ発音を表明するために読みがなを使うというような形で一般の人でも活用できる。日頃そのような書き方をしていれば、いざ人に問われたときにも、自分自身の持つ発音が答えやすい。どちらなのか迷う、どちらでもよいと答えるよりも、みずからの使う日本語に確信・自信が持てるという効果が見込める。語形意識が向上する、自分の語形感覚が揺らぐのを防ぐ機能が期待できるという言い方もできる。書いた時期によって、読みがなが異なることがあるのであれば、それは

自分の中で語形がゆれている、あるいは、A という語形から B という語形へと自分のことばづかいが変わったことを示す証拠であり、それを恥とする必要はない。漢字で書いた記録はあっても、それを自分がどう読んだのかは今となってはわからない、ということになるよりも本人にとって有益である。

5.3 放送における読みがなの基準

『NHK 漢字』の「原則」p.17には計13種類の「表外字・表外音訓を用いてよい語」が載り「なじみのないもの、読みにくいと思われるもの」には読みがなをつけると指示される。13項目のうち、⑥の「文芸作品、映画、演劇などの題名」、⑦の「美術・工芸作品の作品名」は、広い意味で固有名に入れて捉えるならば、これらは(1)「地名・人名などの固有名詞、およびそれらを含む複合語」の中に含めて、「地名・人名・題名など固有名のうち、全国的なじみが低いものには初出の際に読みがなをつける」と整理できる。なお『NHK 漢字』も『共同』も地名を含む語の例として「御影石」を挙げ、『NHK 漢字』は読みがななしで使うものとするが、難読ではなく誤読という観点で見れば、この語に対する現代人のなじみ度が高いとはいいがたく（地元の兵庫の人は別として）、「おかげいし」という誤読が出てくる恐れがある。放送ではアナウンサーの声が読みがなの代わりになるとしても、記者が書く原稿には読みがながあってもよいという印象である。

(2)の「特定分野の語」のうち、③の「歴史上の事件・事物・制度・官位・時代・年号などを表す語」（「飛鳥時代」「銅鐸」など）、④の「伝統的な行事、習俗などに関する語」（「西の市」「初午」など）、⑤の「古典芸能の語」（「伎楽」「木遣り」など）、(3)の「慣用的な読み方を認めるもの」（「狩人」「御用達」）は、広い意味で「歴史語（伝統語）」として扱う。それから①「栄典、称号、職名など」（「旭日大綬章」「瑞宝章」など）、②「皇室の行事に関する語」（「大嘗祭」「新嘗祭」など）、⑨の「その他、各分野の専門用語（適当な言い換え、書きかえないものや、かな書きではわかりにくいもの）」は「専門語」として扱う（⑤は専門語でも可）。このようにすれば、「固有名」「歴史語（現代人の現代的な生活においては、なじみが薄いものを一括して含める）」「専門語」というふうには、大分類としては三つにまとめることができる。⑧に挙がる「原典からの引用（古典・法令・史料・碑文・著作権のある歌詞など）」は、固有名、歴史語、専門語いずれにもまたがる可能性があり、ほかの項目とは性質が異なる。通常固有名や専門語の場合は、それを漢字で書くか、かなで書くかという「語の標準表記」の問題であるのに対し、引用の場合は、原典にある「兎」を「うさぎ」や「ウサギ」に書き換えてよしとするかどうか、意味に加え表記をも引用の定義に含めて「兎」と書くかどうかという「引用の厳密性」の問題である。したがって表記の同一性を引用の定義に含めるのであれば、表内字・表内音訓で書ける語であっても原典に付された読みがなは引用の際にも付する必要がある。たとえば「学校」が原典に「^{がっこう}学校」とあるなら、引用でも「^{がっこう}学校」と書くというようにである。それゆえ上記の三つとは別に「引用の際は、表外字・表外音訓を含むならば読みがなをつける」とするか「引用の際は、表内・表外の別を問わず、原典どおりに読みがなをつける」とする必要がある¹⁴。

以上が放送における読みがなの基準であり、『共同』の基準もほぼ同様である。そのうえで浮かび上がってくるのは、表内字・表内音訓の語には、読みがなの基準は要らないのかという疑問である。

5.4 語形が特定しにくい語

「常用漢字表」にない漢字、音訓の場合に読みがなをつけるのが現在の読みがなの一基準である。しかし表内字・表内音訓からなる語であっても難読の語はある。『NHK 漢字』では「瓦解」「参詣」「充填」「進捗」「推戴」「装填」「遡及」「遡上」「陶冶」「払拭」「補填」「湧出」は、表内字・表内音訓で書ける語ではあるものの、読みがなをつけることが望ましいとする。小坂橋・柴田（2009、p.50）には「さんばい（参詣）」「しんぱ（進捗）」「とうじ（陶冶）」という誤読例が挙がる。

以下では表内・表外の別を問わず、漢字表記した場合に、読みがながないと読み手が語形を特定しにくい場合について、その範囲を考える。花田（2011、pp.88-89）には「問題とされない漢字の欠点」として、①から⑫までの項目が挙がるが、そのうち②③⑤⑥⑨⑩⑫は、語形の特定には直接の関係がないため、残りの5項目を取り上げる。以下には、ここまでの通し番号によって番号をつける。解説と語例は花田（2011）の挙げるもののみまとした（ただし語例の一部を省略）。

- (7) 漢字自体のよみ方が単語のなかで変化するばあい（連濁、連声など）がある
学校 決算 鉄板 頻繁 反応 観音 焼きとり一渡りどり
- (8) 意味のちがいははっきりしないものを、かきわけるばあいがある（同訓異字）
はかる＝測る 計る 図る
- (9) 一単語に複数のよみ方があるばあいがある
日本（にほん—にっぽん）人文（じんぶん—じんもん）既存（きそん—きぞん）
- (10) ことなる単語でも漢字表記がおなじばあいがある
今日（きょう—こんにち）生物（せいぶつ—なまもの）三位（さんい—さんみ）¹⁵
- (11) 複合語を略すると、よみ方がかわるばあいがある
労働組合→労組（ろうそ） 青森・函館→青函（せいかん）

(7)の語中における発音変化は「常用漢字表」の「表の見方及び使い方」の11で「納得」「順応」などを例に説明される事柄であるが、語例が網羅的なわけではなく、発音変化の解説はない。これらの音の変化について、連声や促音化といった現象ないし用語が一般に広く知られているわけではないことから、たとえば単漢字の「音」に「のん」の音があると誤解し、子どもの名前を「音（のん）」とする人もいる。

「表の見方及び使い方」の11に連濁の例が示されないのは、その数が多いことが要因であると推測する。連濁などにより熟語の中で発音変化が生じている語について、そのすべてに読みがなをつけるとなると、手間が増えるという書き手の不満が出そうである。それゆえ(7)に該当する例を網羅的に集めた語形・表記辞典（たとえば「おがわ【小川】連濁」のように表示するなど）を編集し、語形のゆれや誤読がある語については、注意喚起の文言を添えるなどすることにより、多くの書き手にとって、読みがなの要る語の範囲が特定しやすい状態に整えていくというのが現実的な対処法ではないかと思われる¹⁶。

(8)の同訓異字は、上記の例では書き分けの問題にとどまり、読み分けの問題とはならないが、たとえば「描く」と書いて「えがく」とも「かく」とも読めるというような場合は、文脈を頼りにしても、読み手は書き手の意図する語形が特定できない。せめて初出の箇所には読みがなをつけるという処理が求められる。これについてNHK放送文化研究所放送

研究部 (2002a, p.99) には「一般的に「絵」は「かく」、「夢」など抽象的なものは「えがく」となるが、できれば出稿者が「ルビ」を振るなどして区別することが望ましい」とある(「出稿者」はアナウンサーが読む原稿の書き手(記者)のこと)。漢字は使いたいが、語形(読み)はどちらでもよくて、読み手に任せるというのでは、読み手に対して「製品」を提供する作り手としての責任を果たしていないに等しい。

(9)は語形のゆれに該当する。漢字表記するのであれば、やはり初出の際に読みがなをつけて、読み手がどう読むべきなのかを補助すべき事柄である。ただし(10)の場合は、「分別」における「ふんべつ」と「ぶんべつ」のように、用いるべき文脈の違いによって語形が特定できる語もある。文脈により(ほぼ)完全に読み分けが可能な組み合わせの場合は、読みがなをつける必要性は低いと見なすことも可能である。「三位」などは、「さんみ」が歴史的な読みであり、現代人になじみがないことを考えると、順位を表す「さんい」には読みがなはなし、「さんみ」には読みがなをつけるというふうに、特殊事例のみに読みがなをつけるという方法が有効である。(10)に関しては、読みがなをつけるように気をつけるという書き手も実際に存在する。たとえば高島(1999, p.34)は、どういう場合に自身が「ふりがな」を使うのかを記している。

- (12) 固有名詞、特殊なことばのほかは、たいてい二つ以上の読みかたがあるばあいである。「奥には工場こうばがあって……」といったもの。これは無論もう一つ工場こうじょうという読みがあるからだ。「この字知らないだろ? 教えてあげる」式のふりがなはつけたくない。

後半の記述にあるように、同氏にとっては難漢字かどうかよりも、語形の特定ができない語のほうが読みがなをつける優先度が高いという方針である。身近な例としては「牧場牛乳まきば」(ジャパンミート(スーパーマーケット)の紙パック)と記されたものがある。非一般的な「まきば」を意図したことを買い手に読み取らせるための読みがなである¹⁷。

(11)の略語は、変則的な読みになるものについては、その語形を示すための読みがなが考慮されてもよい。元の語からの類推により語形がゆれる恐れがあるからである。「労組」は「ろうそ」に加え「ろうくみ」とも言うが、「労働組合」という元の語形を考えれば、あながち不自然な語形でもなく、「ろうそ」の慣用をとるのか(「音+音」という意味では合理的)、「ろうくみ」による語形の復元のしやすさをとるのか、判断が難しくなる(「信組」は「しんくみ」のほうが「しんそ」より一般的)。「外為(がいため)←外国為替」なども元の語形からの変化が大きく、それが読めない人を笑うわけにいかない¹⁸。

以上に加え、前述したように誤読が心配される語には読みがなをつける。これが表記がもとで語形に新たにゆれが生じる事態を抑えるための方策となる。上述の4で取り上げたのは、表外字・表外音訓の漢語サ変語幹の場合であったが、表内字・表内音訓の枠内であっても誤読は生じる。「画策」「懸念」「殺生」「相殺」「吹聴」「遊説」に対する「がさく」「けんねん」「さっしょう」「そうさつ」「すいちょう」「ゆうぜつ」といった例がある。前述した歴史語や専門語などには、現代人にとってなじみの薄い語が多く、誤読が生じやすい。皇室に関わる「参内」は「さんない」と読まれ、仏教に関わる「発願」は「はつがん」と読まれるようにである。

以上のように読み手が語形を特定できることを重視するならば、マスメディアが想定するよりも、読みがなを要する範囲が広いことは明らかである。戦前の総ルビの時代には、

どの漢字が難漢字なのかということは考えずとも読みがながつけられた。一部の語にルビをつけるパラルビの場合は、読みが複数ある語に対して積極的に読みがながつけられた。そののち「常用漢字表」の時代になり、表外字・表外音訓に読みがなを使う一方で、漢字そのものは簡単なものであり表内音訓で処理できる、という語の場合は読みがなをつけない、読みの特定は文脈ないし読み手に任せるといった傾向が生じたが、このような態度は歴史的には浅いものでしかない。

ただし読みがなをつけるべき範囲と読みがなを使うのが望ましいかどうかは別問題であり、読みがなの使用には「読みがなさえつけば、使っても問題はないと制作現場が考えてしまわないかという心配」が放送の分野から指摘される（山下（2010、p.48））。このような心配も考慮したうえで読みがなの運用についての注意事項をまとめると、①簡単な字で書ける簡単な語を選ぶ、②語形の特定がしにくい漢字表記の語には、かな書きや言いかえを行う。漢字で書くのなら読みがなをつける、③表内字・表内音訓で書ける語であっても、現代人のなじみ度を考え、必要に応じ読みがなをつける¹⁹、④表外字・表外音訓を含む語には、原則として読みがなをつける、というような段階が考えられる。また、引用の際は、難字・難語の含まれる箇所には類語の使用などにより間接引用を施し、読みがなを使わずに済むよう工夫する、直接引用が必要な場合は読みがなを添え、それが原典どおりなのか、引用者の付したもののなのかを明記するという処理を要する。

ルビが小さくて読みにくい、インターネットの文章にはルビが使いにくいとの問題がある（山下（2009、p.120））。もしそうであるなら、カッコ内に語形を示す方法がとりうる²⁰。ただし文字数の制限にも関わってくるため、たとえば一般論として、原稿の文字数の換算において、カッコ内の読みがなは文字数から外すというような規定を設けることが可能であるかどうかを検討される必要がある。

6. おわりに

本稿では複合サ変動詞語幹の表記を検討し、どのような表記の原則があり、どの語に表記の不安定なところがあるのか、その原因は何かということを明らかにした。本稿の議論が、今後、マスメディアや教育の分野において表記の統一を検討する際の基礎資料とならうことを願う。表外字・表外音訓を含む語については、大学生調査をもとにし、目立つ誤読の例と、その要因を考察した。このことにより、今後、これらの語を現在の常用漢字並みに漢字表記して用いるかどうかを議論する際に、取り扱いに注意の要る語がどれなのかをあらかじめ把握しておくことが可能となった²¹。

後半では、読みがなの基準について検討した。「当用漢字表」（1946）の時代は、漢字と音訓の種類を減らし、かな書きや言いかえを積極的に行うことによって、語形が特定しやすくなることが目指された。「当用漢字表」というと、漢字制限の側面が取りざたされがちであるが、語形を重視し、読み手が迷わずに済むことを目指したことは高く評価される必要がある。「常用漢字表」（1981）の時代になると、使用できる漢字・音訓が増え、語形の特定がしにくい語が出てきた。それに対し、読みがなの使用を認める文言が答申の中には見られたものの、一般の日本語話者にわかりやすい形では、その基準が示されなかった。2010年の「常用漢字表（改定）」も同じである。

その一方で現実社会においては、ワープロの普及（1980年代）、パソコンのワープロ

フトの普及 (1990年代後半)、スマートフォンおよびSNS の普及 (2000年代)、というように、徐々に人々が機械を用いて表記を行い、それによって書かれたものが多くの人の目にふれる可能性が広がった。機械により難字・難語がいくらかでも出力される一方で、書き手に読みがな使用の具体的な基準は提示されないままである。それでは、読み手への気づかいを読みがなによって示したいという書き手にとっては、困る状況が続くことになる。個人の判断で読みがなをつけるというのも、そう容易なことではない。

いざ読みがなの基準を設けるとなった場合には、単に表外字・表外音訓であることを基準にするのではなく、語彙 (現代人のなじみ度)、意味 (漢字が意味の理解の助けになるかいか)、語形 (読みがな特定できるか、誤読はないか)、といったことをすべて考慮したうえで²²、その語の標準表記として漢字表記が望ましいのかいか、読みがなが要るのかどうかを決めるという手続きを要する。読みがなの位置づけを明確にすることは、現代の日本社会において、差し迫って重要な課題である。

注

- 1 読みがな全般は矢田 (2005)、文学における読みがなは今野 (2020) を参照。
- 2 品詞・語種は作業用の情報であり、市販の『NHK アクセント』には載っていない。
- 3 城生・松崎 (1995, p.44) に「T シャツ」「U ターン」のように「字形に着目してできた語などは、「ティーシャツ」「ユーターン」のようにカナ書きすると、かえって妙な感じがする」との指摘がある。
- 4 1948年の「当用漢字音訓表」では「込」は「こむ」のみ認められ、「こめる」は「こもる」とともに、かな書きが基本となった。そのあと、1973年の「当用漢字音訓表 (改定)」で「込」に「こめる」が追加される。「混」は「当用漢字音訓表」で「コン」「まぜる」が認められ、「まじる」「まざる」が「当用漢字音訓表 (改定)」で追加された。さらに2010年の「常用漢字表」に「こむ」が追加され、「込む・混む」の書き分けの問題が生じた。「こもる」については同漢字表に「籠」が採用され、「ろう・かご・こもる」が表内音訓である。他動詞の「こめる」については同表に言及がなく、辞書の扱いとしては、表内音訓扱いする辞書 (『岩国』『大辞林 第4版]) と表外音訓扱いする辞書 (『三国』『新選』『新明解国語辞典 第8版』『明鏡]) とに分かれている。自動詞の「籠もる」が表内音訓であるから、そこから類推適用して他動詞の「籠める」も表内音訓扱いにできる、とするかどうかについての判断が辞書により異なるためである。
- 5 「じか」を漢字表記すると「じきとりひき」と区別できないが、『共同』『読売』は「じきとりひき」の語形にはふれない。「じかとりひき」のみで足りると判断されたようである。なお、インターネット上の文章などには、「直取引」を「ちよとりひき」、「直談判」を「ちよくだんぱん」と読む誤りが見られる。
- 6 三宅 (1961, p.10) では「梅雨」のようなかなの使い方を「ふりがな」、「梅雨 (つゆ)」のような使い方を「わりがな」と呼び、両者を合わせて「そえがな」とする。
- 7 『NHK 用字用語辞典』(1960) には「奪略 [×掠]」とあり「防遏」は見出しがない。1973年の『NHK 用字用語辞典 第2版』も同様であるが、「奪略」は1981年の『新用字用語辞典』で削除された。
- 8 代用字に関する批判は、たとえば水谷 (2012, pp.118-121) を参照。

- 9 『教科書』に「燻蒸」はない。「ふえん」は「敷衍」と書く。
- 10 『NHK アクセント』に二字漢語として載り、全ひら指定される「欣喜」「猜疑」は『NHK 漢字』では「きん喜じゃく躍」「さいぎ心」と書く四字漢語、三字漢語として載る。単位の問題などもあるため、二字漢語の考察対象からは外す。
- 11 誤読かどうかの判断にあたり、坂本ほか（2001、p.51）にある「常用漢字は表内音訓を正答とした。表外字については、『大字源（角川書店）』『新大字典（講談社）』『漢和大辞典（学習研究社）』『新漢和辞典（大修館書店）』などを参照し、辞書に掲載されている音訓を正答とした」との基準に従う。
- 12 NHKの表記辞典では『NHK 用字用語辞典』（1973）で「びんらん」が新立項され現在に至る。「ぶんらん」はない。NHKのアクセント辞典では1943年の初版では「びんらん」と「ぶんらん」をともに立項していたが、1951年版で「ぶんらん」が削除され、それ以降は「びんらん」のみの状態が続く。
- 13 数十の辞書を確認したが、「ははがた・ちちがた」を採用するものは見当たらない。
- 14 原典からの引用にふれた項目は、「常用漢字表」（1981）に合わせて編集された『新用字用語辞典』（1981）で初めて記載され、『新用字用語辞典 第2版』（2001）、『新用字用語辞典 第3版』（2004）、『NHK 漢字表記辞典』（2011）へと受け継がれている。
- 15 『NHK 漢字』では「①きょう ②今日」と「今日」、「なま物」と「生物」のように、和語のかな書きにより音訓の読み分けができるようにしている場合もある。
- 16 清濁などに地域差が出る場合がある。固有名も含め標準語と方言の語形の区別を記した語形重視の表記辞典が要る。たとえば小林（2017、p.72）には、あるとき「小早川」という名字が沖縄では「こはやがわ」と読むことを知ったとの記述がある。漢字を見ただけでは気がつきにくい事柄である。
- 17 阪倉（1977、p.1）に「「市場」が、イチバとシジョウとのどちらを表記し、「空間」が、クウカンとアキマとのいずれを意味しているかを、その文章の書き手自身がまず明示しておくことは、読者の理解を容易ならしめるゆえんに外ならない」との指摘がある。
- 18 岩淵（1976、p.5）は「外為」について、1976年のロッキード事件がらみで「外為法違反」ということばがしきりに使われ、新聞では「外為」と書かれていることに関連し、「たまたま「外国為替」を新聞で「外為」と略したものだから、声に出して言わなければならないようになったときに、だれかがガイタメと言って、それが、新聞界や経済界で使われたのであろう」と述べる。
- 19 NHKの第1229回放送用語委員会で日本語学者の水谷修氏（1932～2014）は「一勾・二勾の「勾」のように表内字であっても、若い人にはほとんど読めない字があるということ。こういう場合は「一^{いっしやく}勾」のように仮名をつけて覚えてもらう。そんなシステムを作ればよいのではないかと提案した（NHK 放送文化研究所放送研究部（2002b、p.102））。「勾」は2010年の「常用漢字表」で削除されたが、現在の表内字の中にも同氏の指摘が当てはまる場合があることは前述したとおりである。
- 20 山下（2009、p.120）に丸カッコ内に読みがなをつけると「読みがなと本文の字の大きさが同じなので、内容が伝わりにくくなる」との記者の指摘があるが、これは読みがなのついた漢字表記の語の語形があらかじめわかっている立場（書き手）による捉え方である。漢字を見てその語形が頭に浮かぶ人にとっては、その次に読みがながあ

ることにより、同じ読みを2度繰り返すことになり煩わしい。しかし読みがなをつけるのは、漢字表記のみでは語形が思い浮かびにくい人(読み手)のためであり、そのような人にとって、読みがなで語形が明らかになるのはありがたいことである。

- 21 本格的に、どの語を常用漢字並みに用いるのかを決める際には、一般の人がどの漢字が読め、どの漢字が読めないのかについて約11,000人の高校生から得た回答をもとに議論している小坂橋(2009)、小坂橋・柴田(2009)のような大規模調査を要する。
- 22 橋本(1938)は「ふりがなの効用」の一つとして「同一の漢字を人によつて色々によんで言語が不統一になるのを防ぐ」(本稿で使用した『文字及び仮名遣の研究』のp.237)と述べていた。現代日本の状況を考えて、耳の痛い予言的な指摘である。

参考文献

- 岩淵悦太郎(1976)「妙な日本語」『文化庁月報』96、pp.4-5
- NHK放送文化研究所放送研究部(2002a)「NHK 新用字用語辞典の表記の変更」『放送研究と調査』52-3、pp.94-99
- NHK放送文化研究所放送研究部(2002b)「テレビと漢字」『放送研究と調査』52-3、pp.100-103
- 大野晋(1983)「国語改革の歴史(戦前)」『日本語の世界16』中央公論社、pp.5-94
- 小坂橋靖夫(2009)「高校3年生は、「新・常用漢字」をどのくらい読めるか(1)」『放送研究と調査』59-10、pp.34-45
- 小坂橋靖夫・柴田実(2009)「高校3年生は、「新・常用漢字」をどのくらい読めるか(2)」『放送研究と調査』59-11、pp.34-55
- 小林信彦(2013)『森繁さんの長い影』文芸春秋
- 小林信彦(2017)『わがクラシック・スターたち』文芸春秋
- 小林弘忠(2002)『ニュース記事にみる日本語の近代』日本エディタースクール出版部
- 今野真二(2020)『振仮名の歴史』岩波書店
- 阪倉篤義(1977)「ルビの復権」『図書』331、p.1
- 坂本充・山下洋子・柴田実(2001)「読める漢字・読めない漢字」『放送研究と調査』51-10、pp.46-73
- 城生佰太郎・松崎寛(1995)『日本語「らしさ」の言語学』講談社
- 高島俊男(1999)『お言葉ですが…』文芸春秋
- 高島俊男(2005)『お言葉ですが…⑥』文芸春秋
- 中川秀太(2020)「教科書と放送における標準表記の比較」『青山語文』50、pp.107-91
- 橋本進吉(1938)「ふりがな論覚書」『ふりがな廃止論とその批判』白水社、pp.237-241(本稿では岩波書店の『文字及び仮名遣の研究』(1941)に所収のものを用いた。注22に記したページ数も同書のもの)
- 花田康紀(2011)「現代日本語の漢字表記の問題」『国文学 解釈と鑑賞』76-1、pp.86-97
- 水谷静夫(2012)『随筆 辞書を育てて』岩波書店
- 三宅武郎(1961)『現代国語の書き表わし方』明治書院
- 矢田勉(2005)「振り仮名」『朝倉漢字講座1 漢字と日本語』朝倉書店、pp.164-181
- 山下洋子(2009)「放送用語委員会(東京)「常用漢字表」見直しに対するNHKの対応」『放

送研究と調査』59-3、pp.92-95

山下洋子 (2010) 「視聴者はどのくらい“漢字表記”を求めているのか(2)」『放送研究と調査』60-6、pp.42-51

山下洋子 (2014) 「放送用語委員会(東京)用語の決定」『放送研究と調査』64-5、pp.64-73

山下洋子 (2017) 「NHK アクセント辞典“新辞典”への大改訂⑧語形の検討」『放送研究と調査』67-2、pp.74-85

Received : April, 25, 2022

Revision received : June, 19, 2022

Accepted : August, 17, 2022

